

小説部門優良賞

Pan-Breadism(汎パン主義)

盛岡第四高校2年 小山文遥

自慢じゃあないが、僕は変人だ。三度の飯よりパンが好きなのだ。特に朝のパンは格別だ。朝にパンなんて非国民だ、という人間もいるかもしれない。だが僕からしてみれば、朝にパンを楽しむ時間こそが僕が朝起きる理由であり、原因であり、原動力なのだ。機械が電気なしでは動かないように、帆船が風なしでは動かないように、僕にとってパンとはそういうものだ。

パンが日本に伝来したのは一五四三年だと言われている。これは実に五百年近く前である。それほど前から伝来していたにも関わらず、日本でのパン食はそれほど発展しなかつた。これには、様々な要因があるだろうが、一番大きいのは小麦の栽培が難しかった点だろう。確かに、日本の気候に適した作物は米だったかもしれない。だが、それだけで米食こそが日本人らしさだと謳い、パン派を迫害する理由になるだろうか。それは移民排斥の動きと何が違うだろうか。自分たちが優れていたりというところにあげて、世界にはびこる問題の派の戦いは、もはや、攻撃する。パン派、ご飯

縮図ともいえる。

だからこそ、僕はご飯派、特に過激派に対しては断固とした抵抗をすべきだと思う。これはただの朝食に限った話ではない。より大きなスケールの戦いなのだ。

ところで、近年、米粉パンなる食品が出ているらしい。米粉パンはその名の通り、小麦粉の代わりに米粉を使った、もしくは、米粉と小麦粉で作られたパンである。米粉パンをパンとして認めるべきか、それは悩むまでもない。こいつは存在が罪である。確かに、小麦アレルギーの人にとって主食になれるほどのパワーを持つ。だが、パンと比べるとあまりにも弱いのだ。パンのおいしさの源とは、すなわちグルテンである。それがあることで、パンは初めてパンとなる。現に、僕が食べた米粉パンには、パン特有のふわふわ感が薄かった。タックルを封印された吉田沙保里のようなものだ。タックルを封印された吉田沙保里は、それは並大抵の人間よりは強いだろうが、タックルを封印されていない吉田沙保里と比べれば、その差は大きなものとなるだろう。

グルテンとは、吉田沙保里のタックルほどの威力を持つものであり、それを弱体化されない。米粉パンがそのままのパンに勝てるはずがない。それは自明の理であろう。

「おい、自分の世界に入っていないで戻って来てくれよ」

少々、長く考えすぎていたらしい。集中して  
 いてなかなか気が付かなかった。集中し  
 「ああ、すまない、集中していて気が付かな  
 かったよ」  
 これも、白米に対するパンの優越性を示す  
 結果にならないだろうか。集中力が上がる主  
 食は、ずばりパンである、とか。  
 「まあ、山崎はそういう、自分の世界に入る  
 時が多いし、気にしてないけどさ」  
 そういう山本の眼差しが、スパーで駄々  
 をこねる子を遠目に眺めるとき、慈しみと  
 若干の呆れが含まれた眼差しで、ちよつとき  
 つい。しかも、山本は僕より背が高いから、  
 更に自分の幼児感が増す。  
 「その、スパーで駄々をこねる子を見るよ  
 うな目、やめてくれないか。きつい」  
 山本はどつと笑った。何がそんなにおかし  
 いんだよ。と若干切れ気味に言った。  
 「いやあ、昨日スパーでそんな子を見つけ  
 たからさ、そんな顔してたのかな、って思う  
 と無性に笑いが込み上げてきたんだ。別に、  
 山崎を馬鹿にしてるわけじゃあないよ」  
 山崎を馬鹿にしてるわけじゃあないよ。  
 さすがに、空気を読んで適当なことを言った  
 のだろう。それが、ほんとにそんなことがあ  
 ったか。信じがたいけど。  
 「お、信号変わったし、行くか」  
 やたらいいタイミングで変わる信号だ。交  
 差点だから、毎回一分ほど待たされるのに、  
 今日はずいといっているみたいだ。

これ、これも白米に対するパンの優越性を表す結果、と一瞬思ったが、オカルティストやスピリチュアリスト共にパンが担がれるのは不愉快だ。これはたまたまだな。

横断歩道を渡ると、会話はめつきりなくなつた。これは別に仲が悪いわけではない。特別面白いような話題が何にもないからだ。それに、今更無言が怖いとも思わない。そりゃあ、山本はフイジカルは明らかに強そうだし、何考えてるのかわからないような顔をしていゝるし、背も中学生にしては相当高いが、別に悪い奴じゃない。変な奴ではあるかもしれな

いけど。それに、背が高いことは悪いことじゃない。現に、今も役に立っている。日よけとして。山本は、何か言いたげな表情をしてこつちを向いたが、やがて、また前を向いた。

「何か言いたいことがあるなら言ったほうがいいと思うけどね、僕は」

山本はその見た目とは裏腹に、意外と優しい。優しいというか空気が読めるといふか。とにかく、自分より相手の利益や感情のほうを考へてしまふのだらう。だから、こんな風に催促はする。それで言ってくれるかどうかは、割と状況にもよるが、言わないよりマシだ。

「私は友達の役に立ててうれしいですよ」  
「棒読みだった。つまりこれは皮肉です。間

違ひなく。嬉しそうで何よりだよ」

残念だが、僕はそんなに優しくないぞ。

学校につくと、先生たちに挨拶する山本に  
つられて僕も挨拶をする。山本いわく、バス  
ケ部ではそういうところが厳しいらしい。運  
動部どころか、文化部にすら入っていない。帰  
宅部の僕からしてみれば部活なんて未知の領  
域なわけで、それがどういうところなのかは  
わからなかった。

二階へ続く階段を上り、山本と別れた。  
教室について、荷物をまとめた。教室の机  
から漂う、木の優しい匂いが鼻孔をくすぐる。  
目を閉じれば、丸太小屋にでもいるようで、  
無性に口が寂しくなる。きっと、教室で食べ  
るパンはおいしいに違いない。マンションで  
は味わえない、風味がプラスチックされたパンとい  
う想像に胸が躍った。  
例えば大自然の中、海とか山とか。そんな  
ところでは食べるパンは、きっと特別感でいつ  
もの何倍もおいしいのだろう。マイナスイオ  
ンとか、そういう感じの何かがおいしさを増  
幅させたりするのだろうか。

欲望はとどまることを知らないが、行動に  
は限界がある。富士山の頂上で食べるパンは、  
それはもう、考えられないほどおいしすぎる  
うが、僕は登れるとは思えない。少なくとも  
今のままでは。それと同じなのだ、教室でパ  
ンを食べるということは。行動の限界を越え  
なければ、それはかなわない。僕は肺いっぱい

いに空気を吸うと、ため息の代わりにそれを吐いた。窓からさす光は、神秘的に見える。塵を反射して、光の線を作り出す。この光景は見慣れていても、どこか人を引き付ける力がある。教室に人が増え始め、そんな僕の幸せがはかなく消え去る。八時十五分を過ぎたあたりから徐々に騒がしさも増していく。授業が始まれば、人が変わってしまったように静かになるというのに、今だけはみんなうるさい。その中には寝ている人もいるだろう。そんなんだから授業中寝るんじゃないのか。と、ところで今日は月末、それに金曜日なわけだ。多くの学生にとってこのタイミングで得られるものがある。それはお小遣いだ。もちろん、僕ももらうわけだが、この使い方を考えるのは学生の醍醐味といっても差し支えないのではないだろうか。ぼくはそんなお小遣いを使う場所はもう決めてある。それはもちろろんパン屋である。パン屋とはパンを売るだけのもので、裏で今まさに作られようとするパンたちの産声の響く店内。香ばしいにおいを漂わせる店先。それらすべてを味わってこそパン屋なのである。そして五感すべてがパンに支配される空間というのはいくらだ。けで価値がある。すし好きに置き換えてみれば、高級ずしが自分だけの周りを回る回転ずしのようなものである。すき焼きのプールにつきるき換えてみれば、すき焼きのプールにつきる

ような幸福である。パン好きにとってのパン屋とは、自分を中心に回る回転ずしであり、すき焼きのプールなのである。月に数度行うパン屋巡りだが、満を持して隣の駅前へ行こうと思う。レベルの高い店が集まっているという噂だ。想像するだけで唾液が止まらない。

今回山本も誘ってみることにしよう。いや、明日が全く楽しみで仕方ないくらいだ。

パン屋巡り、それは素晴らしいことである。新たな新天地の開拓。さながら私は令和のコロニクスである。コロニクスが大海原から新大陸を発見したように、数多のパン屋から素晴らしいパン屋を探すのだ。

天気も上々、パンの神も僕らを祝福しているようだ。

「パン屋巡りなんて人生初だよ」

山本はきつと、期待に胸を膨らませているのだろう。人生初のパン屋巡り、興奮しないはずがない。

早速一軒目へと急ぐ。金には限りがあるので、ほとんどの移動は徒歩だ。山本に関して、まあ徒歩でも問題は無いだろう。バスケット部なんだから、ちよつと歩くぐらいで死にかけるなんてことはあるまい。

「ようし、それじゃあ一軒目に急ごう」

最近便利なもので、スマホでマップが開けるし、パン屋を検索することだってできる。

早速初めの一軒目は、駅前商店街にある店だ。浮かれ気分で歩くと、自然と早歩きになる。だが、隣町ともなると早歩きをしたところでそれほど早く着くということもなかった。我々を祝福しているかに見えた太陽は、実は呪っているんじゃないかと思うほどに強い日差しの中、歩みを続けた。やっこのことで商店街に入ったところで、焼き立てのパンの香りが肺いっぱい流れ込んできた。どうやら、商店街のすぐ手前にあるらしい。「おい、すごい良い匂い、食欲を掻き立てる匂いだ」

山本の言葉に返す言葉はない。ただ頭を振り、同意するだけでいい。ああ、なんて匂いだ。歩き疲れて空腹の僕にはクリーンヒットする匂いだ。

待ちきれなくなって店内に入った。いらっしやいませの声とともに、より一層魅惑を増した香りが、ことごとく鼻を通り、気管を通り、そして肺に入っただけで、バター以外の、のりと塩味の効いた香り、焼き立ての、他のどの言葉で形容しようもない素晴らしい香り、それが若干の熱量を帯びてやってくる。匂いの充満する店内に入って思わず、「ここでなら死んでもいい」と口にした。

「さして、素晴らしい匂いに包まれながら、商品を見ることにしよう。と、店内を見回した。食パンやクリームパン、そしてクロワッサン



やメロンパンにフランスパン。パン屋にある  
 べきパンは全部あるように見えた。僕は左手  
 にトレート、右手にトングを持つと、メロン  
 パンを一つ引き上げた。  
 メロンパンには様々な特徴が混在している  
 といつていい。クッキー部分のサクツとした  
 食感、その中に包まれた生地繊維一本一本  
 が織りなすふわふわとした舌ざわり、それら  
 はまるで、堅牢な殻に包まれた甲殻類を食べ  
 る時のような感覚を覚えさせる。しかし、そ  
 の魅力はそれだけにとどまらない。その外側  
 と内側、その両方を同時に食べるといふのは、  
 征服感と背徳感を同時に味わうようなもので、  
 それもまた魅力的である。さながら、サワガ  
 ニを食べているようである。すなわちメロン  
 パンとは、パン界のサワガニである。  
 次に手を伸ばしたのはフレンチトーストだ。  
 フレンチトーストのベースとなる食パンは、  
 最もスタンダードなパンである。パンと聞い  
 て思い浮かべるシルエットは何か、と聞かれ  
 れば、最も票が集まるのは食パンだろう。欧  
 米に根付いたパンは、海を越えてはるばる日  
 本へとやってきたのだ。  
 食パンはそのシンプルさで、多くの人間に  
 食べられてきた。そのままでもよし、ジャム  
 を塗ってもよし、トーストしてバターを塗る  
 もよし、はたまた、具材をサンドするもよし。  
 その万能さはパン界でもそう並び立つものは  
 いないだろう。その万能な食パンにミルクと  
 卵と砂糖という、まさに三種の神器とも呼べ

の強力な助っ人たちをまとわせ、そして焼く  
 のだ。パンとしての完成度でも、他のパンを  
 優に超えるほどだというのに、それはもはや  
 ベースに過ぎず、さらに衣をまとわせるとい  
 う、まさに鬼に金棒。食パンを室伏広治だ  
 すると、フレンチトーストはハンマーを持っ  
 た室伏広治である。  
 さて、食パンに話を戻すと、食パンがこれ  
 ほどの万能さを引き出しているのは様々な要  
 因があるだろう。第一に耳、耳がなければふ  
 わふわとした内側だけが残ってしまい、締ま  
 りのない、メリハリのつかないパンになって  
 しまうが、耳があることによりそれを回避し、  
 今の地位を確立したともいえる。それに、味  
 のプレーンさもその万能さに一役買っている。  
 ほんのりとした、柔らかい甘みだけが口に残  
 るような味。それはどこか懐かしさすら覚え  
 る味である。  
 ほかのパンたちが具材との掛け算によつて  
 できたものだとするなら、まさに食パンは、  
 その掛け算の可能性を我々人類に対して見せ  
 てくれるようなパンなのである。  
 僕はこのパンたちの会計を済ませると、外  
 に出た。一刻も早くこのパンたちを貪り、食  
 し、堪能したかった。待ちきれない腹が鳴っ  
 た。あと少しの辛抱なのだ、我慢してくれ。  
 カバンからウェットティッシュを取り出す  
 と、手の指一本一本を丁寧に消毒した。汚い  
 指で触れるなど言語道断である。  
 店の前にいくつか置かれた椅子の一つに腰

かけて、山本を待った。このドキドキ、そしてワクワクは、心臓の鼓動を早める。限界を迎え、再び腹の音が鳴ると同時に、山本が店内から飛び出してきた。  
 山本はあたりを見回すと、すぐに駆け寄ってきて、横に座った。僕は山本にウェットテイツシュを手渡すと同時に聞いた。  
 「山本は何パンを買ったんだ」  
 山本はティッシュを受け取りながら答えた。  
 「メロンパンとクロワッサンだよ」  
 「なるほど、いいセンスだ」  
 クロワッサンとは、なかなかいいセンスをしている。あのサクツとした食感はやはり、クロワッサンでないと味わえないからな。  
 僕はいただきます、と小声でつぶやいてからメロンパンを一口食べた。サクツ、口の中でほろほろと崩れるクツキー、あらわになつた内部もカプリ。しっとり系じゃない、もちり系だ。外サク中モチのメロンパンだと、なるほど。こういうパンもあるのか。  
 「こいつは新感覚だ、中がもちりとしたメロンパンなんて今まで食べたことない」  
 中がもちもちのメロンパンなんて、そんなものがこの世に存在しているのか。それに、中には優しい甘さが広がっている。なんだ、これ。  
 感動のさなか、一人、店から出てきた。見ることから屈強そうな男性だ。店には客がいなかったはずだが。  
 「そこのお前、いいセンスだ」

開口一番、僕のほうを指さして言った。なんだ、いいセンスって。「こんなにもちもちとしたパン、食べたことないだろう」

男が胸を張って言った。確かに、それはその通りだ。何か秘密があるのか、隠し味的な。沈黙する僕と山本をよそに、男は再び自慢気に、浸るように語りだした。

「実に衝撃的なパンだろう。このパンは俺のすべてが詰まってるって、いや、日本のすべてが詰まってるって、いって過言ではないのだから」

やたらスケールがでかくなったな、とか、そもそもこいつは一体誰なんだ。という山本と目があつた。山本が小さく、どうする、と言ってきたが、どうするもこうするもない。こんなことになるなんて予想してないから今からここから逃げる手を探すしかない、と小声で答えた。

「へえ、日本のすべて、いったいどんなものが詰まってるんですか」

これからどうする。どうしようもない、とりあえず話させよう。という脳内会議の末、ひねり出した一言だった。話していれば、どこかで飽きが来るはずだ。

男は言葉を聞いて、やり、と薄ら笑いを浮かべた。やらかしたか。

「そう、それはずばり：：」

やけにためる、雰囲気気圧されて固唾を飲んだ。

「米粉、だ」  
 静寂が場を支配した。これだけためて、米粉だと。バカにしているのか、しかも、パンに米粉なんて、七つの大罪を全部合わせて二乗したぐらいの大罪だ。米粉を使ったパンのようにな何かをパンとして売るのは商品表示法違反になるくらいの大罪だ。  
 「なんでパンに米粉なんて入れるんだ」  
 思わず声が漏れた。抗議するような言葉に、聞き捨てできない。これは戦いだ。後に引くことはできない。これは戦いだ。後には引く。お前も食べたろう、あのもちもちとした食感。これは小麦粉と米粉が出会って初めて生まれる食感なんだ。それに、今は小麦粉の値段も上がっているし、時代は米粉だよ」  
 確かに、このパンを食べて、初めての食感に驚いたのは認めよう。だが、それとこれとは話が違う。大体、小麦粉に米粉を混ぜるという発想が狂気だ。小麦粉は様々な料理に使われていて、小麦粉に対して米粉はどうか、ただの粉だ。小麦粉に似せようとしただけの粉。  
 「まるで、米粉が素晴らしいかのようにつけていますけど、この感じは小麦粉が大多数を占めていないとあり得ないはずですよ」  
 振ると、僕に対して、「だが、それでも時代は米粉に移り変わっていく。だが、それでも時代に根拠を見せてやる」  
 そういって男が店に戻ったかと思うと、すぐに戻ってきた。

「これを見てくれ」  
 そう言つて男が見せてきたのは、日本の、  
 米と小麦の食料自給率を表すグラフだった。  
 「こいつを見ると、米の自給率はほぼ百パー  
 セントある。それに対し、小麦は微増傾向に  
 あるとはいへ、二十パーセント弱にとどまっ  
 ている。つまり、外国からの輸入に頼りきり  
 というわけだ。それに、米粉の使用はコメの  
 生産量を保つという意味で、日本の食と農業  
 を守ることになるんだぞ」  
 「食料自給率で小麦が米に勝てないのなんて、  
 日本の地理を考えたら当然じゃないか。多雨  
 な夏の気候はまさに米作りに適しているとい  
 つていいはずだ。それに、世界の多くの地域  
 で作られてはいる小麦のほうが、世界全体の生  
 産量は多いはずだ」  
 この手の話題で常にやり玉に挙げられるの  
 は食料自給率の問題だ。やれ米のほうが自給  
 率が高いなどと、馬鹿の一つ覚えのように連  
 呼する人間は多い。大体、そんなのは当たり  
 前だ。なぜ日本に住んでいる人がそんなこと  
 も知らないと思われていたのか疑問でなら  
 ない。そんなものは三歳児でも知っているだ  
 ろう。やはり米派の人間は他人の背景が何も  
 理解できていないらしい。小麦の仮想敵は間  
 違ひなく米であるというのに、その米のこと  
 も知らないで批判していると思われのは思  
 慮が浅いとしか言いようがない。他国を攻め  
 るのに、敵国のことを何も知らない人間に軍  
 の指揮を任せるとは、何ものでもないのだ。

「そうだな、食料自給率だけで語るのはおかしな話だ」

男はそう言って、再びなにかを見せてきた。

「こいつはな、小麦と米の栄養価の表だ」  
 そういつて見せてきた表には、小麦で作られた食パン百グラムの栄養価と、米粉で作られた食パン百グラムの栄養価の差だった。

「特徴的なのは、たんぱく質量だ。小麦に比べて米は十パーセント増加している。もともとの量が少ないとは言え、塵も積もればということだ」

確かに、たんぱく質だけを見れば、米のほうが優れているといえる。だが、全体のエネルギーを加味すると米が一概に優れているとは言えない。というか、どっちもどっちな気がしてならない。

「全体を見てもパツとしないし、これを証拠とするのは難しいでしょ、そもそも米粉と小麦粉でさしたる差がないし」

僕がそう言ったすぐ後、男がにやりと笑った。

「じゃあ、どうしてそこまで米粉を目の敵にするんだ。栄養だって大して変わりはない、自給率だって日本だと多いくらいだ。それで食感も悪くはなかっただろ」

「目の敵にする理由、そんなもの、米を使つたパンというだけで十分だろう。パンというものを裏切つた米粉パンは当然認められるはずがない」

パンという文化そのものを汚す米粉パンな

る存在を、当然許すわけにはいけない。「おいしかつたら何でも良いんじゃないの」

「後ろから、声がした。山本だ。それでおい

「自分の信条も大事だろうけど、それでおい

しいもの食べられないのはね」

山本はそう言って、残っていたクロワッサ

ンを平らげた。

信条を曲げるといのは、例えるならイス

ラム教徒に酒を飲ませるようなものだし、修

行僧に焼肉をおごるようなものだ。

一瞬、男から目を離した。どうしても山本

にこれだけは伝えておかなくてはいけない。

と思った。

「あのな、山本。信条を貫かないって、教義

を守らないようなものだぞ。イスラム教徒が

酒を飲むか、修行僧が焼肉を食べるか。それ

くらい大変な」

一瞬の出来事だ。話しているタイミング、

口もそこまで大きく空いてはいないはず、そ

の口に、メロンパンを詰め込まれた。それと

同時に後ろから両腕を締め上げられた。

「こうなったら実力行使だ」

さっきの男の声だ。くそ、なんなんだこい

つ。口論じゃ勝てないと思っただけで暴力に訴えて

きやがった。野蛮な米食いが。

口から、メロンパンの匂いが広がる。こい

つは米粉が入っているんだ。食べてやるもん

か。と、心は徹底抗戦を唱えた。しかし、体

はこいつのおいしさを知っていた。しかし、体

サクツ。クツキーに歯が入り、もちっとし



た生地が歯を包み込む。歯を食いしばって耐えようする。もちっとした生地をかみ切って、上下の歯が邂逅を遂げた。さながら織姫と彦星のようである。わずかながらの抵抗心は、いともたやすく打ち砕かれた。燃えるような情熱はそのまま鞍替えしたようである。もはや、米粉パンを否定する理由はなかった。感情的に嫌いだ、という以外に否定することはない。そんなものが議論に使われて、食材に負けていたのだ。食材において、おいしさという指標は最も大切だし、なにもものにも代えがたい。結局、食材はおいしさを決定する一つの要素でしかないし、そこにこだわるのは作る人だけではないはずなのだ。

「とところで、あなたは一体誰なんですか。店の人ですか」

男は、待っていたぞ、と言わんばかりの速さで用意していたであろうセリフを口にした。「よくぞ聞いてくれたな少年よ、私はこの店の店長にして、誰よりもパンを愛する男、藤陽介だ。少年のパンへの熱い思いは素晴らしいが、変化を嫌うのはもったいない。パンは常に進化を続けるのだ。ヨーロッパで、アメリカで、そしてアジアでもな。日本には日本のパンがある、それが米粉だった。それだけの話さ」

藤はそう言って、僕らを後に店へと戻っていく。その背中を目で追いながら、口に残っ

たメロンパンの味を確かめた  
 「ああ、メロンパン、結局は美味かったじゃないか」  
 敗者がわめくのは負け犬の遠吠えである。  
 「このおいしさ、米粉が入っていてもパンはパンなんだから」  
 米粉、小麦粉、その両方が織りなすパン、米粉パン。それはパンの希望である。こんなおいしいものを否定するのは、自分の心に反している。そもそも、パンに心を奪われた理由はその味だったはずだ。それを、ただ原料の違いだけで拒絶していたなんて、パン好きの風上にも置けないやつだ。すべての米粉パンに、謝りたい。米粉は日本の食料自給率向上の期待の星。今まで誤解していたのは自分の方だったのだ。  
 「あー、感傷に浸ってるところ悪いけど、周りの視線が痛いし、退散しようぜ」  
 山本に言われて周りを見回すと、たくさん人がこちらを見ていた。  
 「口論うるさかったし、商店街は声が響くし、だからこんなに集まったんだよ」  
 山本は素早く僕の手を引くと、書店街から抜け出すべく駆け出した。  
 遠くから聞こえるのは、「フジベーカーリーのパンをよろしくお願ひします」という、あの店長の掛け声だけだった。